

## ストラスブールで獲得したこと

文学部 011400293 木村友

私は今回ストラスブールで2週間にわたり語学研修を受けた。短期のプログラムではあったが、フランス語の習得に限らず真に実り多き研修だった。本レポートではそれらの収穫を3つに分類し、言語と国に関して学んだこと、人間性に関する収穫、そして精神的に成長したことの順で紹介する。

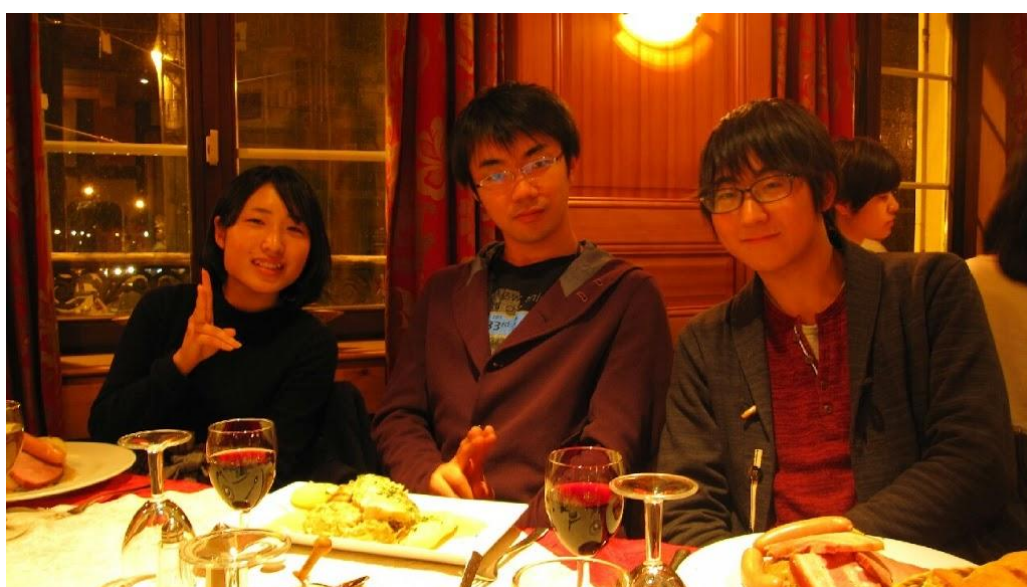


第一に、言語と国に関して学んだことについて述べる。

言語については、フランス語の習得という研修の目的からして当然のことではあるが、単なる語彙の強化、文法の定着、会話能力の向上といった基本的なこと以上の、より本質的なことを学ぶことができた。それは、言語を学ぶ上で、五感と結び付けた学習がいかにか効率的かを実感できたということである。ストラスブールで現地の学生と交流する中で、「会話の中で新たに知った単語や表現は瞬時に覚えられ、しかも忘れにくい」ということに気付いた。ネイティブと話すのが効果的な学習法であることは言うまでもないが、その理由の一つには、異国でのネイティブスピーカーとの会話という特殊な環境の下で頭脳をフル回転させた状態でフランス語を使用することで、言葉の一つ一つがその瞬間の状況と結びついて記憶されるということもあるのだと思った。

またフランスという国自体についても学ぶ部分があった。現地に行って驚いたことの一つに、フランス人は英語を抵抗なく話すということがある。自分は今回の研修に行くまで、フランス人は英語を軽視しており、どんな場合もフランス語での会話を要求してくるものだという、なんとも失礼な固定観念を抱いていた。しかし現地に着いてみると全くそんなことはなく、拙いフランス語であっても、こちらが話そうと努力しているという意志さえ示せば、むしろ積

極的に英語に切り替えてくれることがほとんどであった。特に老夫婦宅へ家庭訪問をした際、向こうから英語で話しかけてきたことにはとても驚いた。一方、始めから英語で話しかけてしまうとさすがにあまり快く思われまいようである。このように現地に行くことで初めてわかることも多く、自分にとってのフランスのイメージが覆されることもたびたびあり面白かった。そのほかにも自然の景観や歴史的遺産、文化的施設の見学を通じてフランスという国を地理的にも精神的にも内部から見ることができ、フランス人の考え方により深いレベルで迫ることができたと感じた。また、日本をより客観的に見ることもできるようになった。



第二に、人間性に関する収穫について述べる。ストラスブールでフランス人と同じ環境に身を置いて生活する中で、日本人にはあまり見られないいくつかの特徴をフランス人が備えていることに気付いた。

その一つが、フランスにおける人間観察の重要性である。フランス人は会話の際、必ず相手の目を見て話していた。それは恐らく、言葉だけではなく相手の表情や仕種からも何かを読み取ろうとし、同時に、自分も表情を通じて気持ちを伝えようとしているからであろうと感じた。その証拠に、彼らの表情はとても豊かだし、ジェスチャーも豊富である。ひよっとすると、フランス語は比較的抑揚の少ない言語なので、感情を伝える手段として、コミュニケーションにおける表情や仕種の重要性がより大きいのかもしれない。このことから、フランス語における視覚情報の役割の大きさを感じた（そもそも自分はリスニング力の未熟さゆえに、相手の仕種に頼らざるを得ない局面はたびたびあったが）。そして、相手の視覚に訴えかけることで実現される一層血の通ったコミュニケ

ーションはとても魅力的なものに感じられた。

もう一つの発見は、自分の内面を表に出すことがもたらす利益の大きさである。ストラスブールで感じたことの一つに、とにかくフランス人はよく喋るということがある。町ゆく人々もカフェの男女もトラムで乗り合わせた婦人たちも、複数人で行動している時はずっと喋り続けているという印象を受けた。そしてまた、彼らは非常に正直であるとも感じた。というのは、自分の思っていることを包み隠さず口にするからである。これは現地の学生たちと話している際に感じたことだが、彼らはとても直感的に話し、一見自分に不利益なことまで平気で口にするので、思わずこちらまで普段は言わないような言葉を引き出されてしまいがちであった。しかし、だからこそより深いレベルでの議論が可能となり、新たな見地を得られることもあるのだろうと思った。自分は普段人と話すとき、外に出すべき情報と内にとどめておくべき情報を無意識に分類し、不用意なことは言うまいと慎重になりがちであった。それが必ずしも悪いとは思わないが、本音をぶつけ合うことで生まれる効果は自分が考えていたよりも絶大なのかもしれないと感じた。この経験を通じ、自分も他人に同調したり批判を恐れて言葉をしぶったりせず、もっと素直に内面を表に出すよう努力しようと思った。

第三に、精神的に成長したことについて述べる。 今回の研修では 18 人の仲間、そして先生方と 2 週間を過ごしたわけであるが、自分にとってこれだけの期間日本から離れて限定された人間関係の中で生活するのは初めてのことであり、学ぶことも多かった。特に、共に成長していく喜びというものを強く感じた。自分たちのフランス語のレベルは、多少の差こそあれ、皆ほぼ初心者の状態であった。それが 2 週間の研修を受けるうちに少しずつ上達していき、研修が終わるころには全員がフランス語を用いた生活にかなり慣れた様子であった。その成長の感触を互いに確かめ合いながら学ぶことはとても充足感を得られるものだった。特に現地の学生と交流する際、聴き取れなかった部分を他の人に説明してもらったり、逆に自分が補足したりしつつ必死



で会話を進めた経験は自分にとってとても大きな喜びを感じられるものだった。そういった苦楽を分かち合う経験から自然と学生同士の結びつきも強まり、最終日には、初対面の人がほとんどであった初日からは考えられないほど全員が仲良くなっていた。

また、困難な事態に何度も直面することで、以前よりも冷静さを保つことができるようになったように思う。言葉が満足に通じず、不測の事態に満ちた環境で生活するにはある程度の度胸と凶太さがないと心が折れてしまう。今回の研修を通じ、どんな事態にも慌てず解決策を模索する強い心が養われたと思う。

以上三つが、私がストラスブール滞在中に学んだことである。語学力の向上や将来への可能性の拡大だけでなく、これからの人生を豊かなものにする上で重要なヒントを多く得られたと思う。今回の研修で得たこれらの事柄を忘れずに、人生の肥やしとなるよう活かしていきたい。

